

(様式第1号)

■ 会議録 □ 会議要旨

会議の名称	令和6年度第1回芦屋市市民参画協働推進会議
日時	令和6年8月23日(金)午後2:00~4:00
場所	東館3階中会議室
出席者	会長 浅見 雅之 副会長 井関 崇博 委員 松井 順子 出口 睦子 宮平 太 高橋 洋一 眞伏 しらべ 事務局 企画部 部長 柏原 由紀 市長公室長 室長 伊藤 浩一 市民参画・協働推進課 係長 大西 貴和 係員 井上 真希 係員 槇野 開人
事務局	企画部市長公室市民参画・協働推進課
会議の公開	■ 公開
傍聴者数	0人(公開又は一部公開の場合に記入すること。)

1. 会議次第

- (1) 開会の挨拶
- (2) 出席者自己紹介
- (3) 会議運営上の説明
- (4) 議題

【議題1】令和5年度第3次芦屋市市民参画協働推進計画の事業実施結果について

【議題2】芦屋市市民参画協働推進計画の芦屋市第5次総合計画(後期)統合に伴う市民意識調査(アンケート)項目について

- (5) その他
- (6) 閉会

2. 提出資料

- (1) 次第
- (2) 委員名簿
- (3) 令和5年度第3次芦屋市市民参画協働推進計画の事業実施結果
- (4) 市民意識調査(アンケート)案

3. 審議内容

(2) 議題

【議題1】令和5年度第3次芦屋市市民参画協働推進計画の事業実施結果について

(浅見会長) 皆さんから「いい街にしたい」という発言がありました。

「いい街」とは何か？根幹にあるのは「市民参画協働」だと思います。市民が意見できて、風通し良く議論が進むことが根底にある街。それが「いい街」のベースだと信じて活動しています。

さっそくですが、議題1に移ります。

「議題1 令和5年度第3次芦屋市市民参画協働推進計画の事業実施結果について」事務局より説明をお願いします。

◆事務局より「令和5年度第3次芦屋市市民参画協働推進計画の事業実施結果（資料3）」に基づき説明。

(事務局：大西係長) 続いては課題です。市民参画協働推進計画に基づく取組のうち、令和5年度中の各課の課題をまとめました。今の芦屋市の市民参画には、大きく三つの課題があると認識しています。この三つの課題について助言をお願いします。

課題1「市民活動者のなり手不足の問題」。

課題2「市民参画の方法や手法」。市政に反映するために、市民の意見をどのように聴取するのか。聞き取る側の話です。

課題3「市からの発信、情報発信」。

まず課題1の「市民活動者の人手不足問題」について市の課題をご紹介します。どのような取組によって解消するかご助言いただきたいです。

「No.14 市民活動者の人手不足問題」図書館での課題です。本の読み聞かせ活動などを行っている団体がありますが、高齢化により継続が難しくなり、今年度で解散するそうです。次世代の担い手を確保する取組事例などご紹介いただきたいと思います。「No.54、No.55 学校支援ボランティア」社会教育推進課での課題です。学校支援ボランティア活動などの人数確保が課題になっているようです。次世代の巻き込み方法、継続性が担保されないところが課題と聞きました。「No.65 地域福祉活動推進事業」地域福祉課での課題です。こちらはメンバーの固定化が課題とのことです。ボランティアや仲間を増やしたいという認識はあるけれど、増やす方法が見当たらないことが課題とのことです。課題1は以上です。

課題2「市民参画の方法や手法」についてです。現在、芦屋市で実施している市民参画の手続きを紹介します。市民意見をどのように施策へ反映していくべきか、他市の事例や取組をご紹介します。

一つ目、市長が直接市民の意見を聞く「市民と市長の対話集会」。

二つ目、計画策定に当たり、広く市民の意見を提出もらう機会である「パブリックコメント」。

三つ目、市政に関するアンケート調査を市民100人対して行う「市政モニター」。

四つ目、ホームページから意見を入力する「市民の声」。課題2は以上です。

課題3「市からの発信、情報発信」。よく行政は情報発信が苦手と言われます。芦屋市では「広報あしや」「ホームページ」、SNSでは

「Instagram」「LINE」などを使って情報発信をしています。5年前の計画策定時のアンケートに「市の情報を取り入れる媒体は何を利用しますか？」という質問項目があり、60パーセントが「広報あしや」という回答でした。やはり紙媒体が強いという印象です。「ホームページ」は2.7パーセントで、驚きました。ホームページは興味のある人が、興味がある項目を見に行くという印象です。ただ「必要としている市民に届いていない」という意見もあります。広報媒体や方法、見栄えなども含め、改善方法などがあればご助言いただきたいです。課題3は以上です。

ご助言、よろしくお願いいたします。

(浅見 会長) 市民参画協働推進計画に基づく取組のうち、令和5年度中に市で行われた事業について報告がありました。市民参画協働推進会議としては毎年の取組の進捗について報告を受ける立場にあり、市が進める市民参画協働の取組がより良く進むため、委員の皆さまからのご助言や、提案などが求められています。

委員の皆さまは、行政とは異なる立場でそれぞれ、まちづくりに関わっていらっしゃるかと思いますが、そこで得た知識やご経験などから、参画・協働の取組を進める上でのアドバイスや体験談や「こんな取組なら市と一緒にできる」などご意見いただけますでしょうか。

(高橋 委員) 「No.25 国際文化推進課：美術博物館のボランティア」について。これは外国人のボランティア募集ですか？

(事務局：大西係長) 外国人のボランティア募集ではありません。

国際文化推進課には「国際交流係」と「文化推進係」があり、No.25は「文化推進係」担当の取組です。

(高橋 委員) No.5の「外国人市民の活躍の提供」について。私は国際交流協会にも所属しています。芦屋市国際交流協会は潮芦屋交流センターの指定管理者です。行政サイドの手伝いを望まれることも多々あります。しかし、外国人、特に東南アジア系の方との関わり方、お手伝いの仕方について非常に苦勞をしています。多文化共生ということで、外国人向けの防災関係イベントなどを開催し、一緒に運営をしたりしましたが、外国人市民に対してどのようにPRすべきかが課題です。

芦屋市は近隣他市とはかなりポジションが違うと思う。西宮市や宝塚市は人口も多く予算もある。行政に対してどうタイアップをしていくか、国

際交流協会会長も非常に悩んでいます。最近は芦屋大学の留学生とタイアップもしました。

「芦屋市として国際文化をどのように育てていくべきか」というところが苦勞ポイントです。行政サイドがもっとやるべきではないかと思うところも多々ある。国際交流協会に随分と依頼されているように感じています。

(浅見 会長) 国際交流協会として「このようなビジョンはあるけど、ここが乗り越えられない」というような課題はありますか？「市民としてはここへたどり着きたいけど、こういう事情でうまくいっていない。」とか。

(高橋 委員) 芦屋市へ転入してきても、日本語ができない外国人も多い。言葉の問題。行政も有事の時は困ると思う。もちろん、国際交流協会もサポートはしますが、どうしていきべきか、難しい話と思っています。

(浅見 会長) ありがとうございます。他に何かありますか？

(宮平 委員) No.36「地区集会所指定管理事業 会議室の貸出し、使用料減免制度など」について。一定条件を満たせば使用料減免という制度があり、社会福祉協議会も減免対象団体です。ただ、社会福祉協議会が設置している地域福祉活動団体が減免利用をするとき、地域福祉活動団体利用者が社会福祉協議会へ登録許可カードを取りに行かなくてははいけない。登録許可カードを社会福祉協議会で借りて、集会所で提示して部屋を予約する。その後、また登録許可カードを社会福祉協議会へ返す。もう少し手間を軽減してほしいです。

(高橋 委員) 証明のために登録許可カードが必要なら、取りに行けばいいのでは？

(宮平 委員) 家の近くの集会所を予約したいのに、一度、呉川町の社会福祉協議会まで登録許可カードを取りに行き、また集会所へ行かなくてははいけない。登録許可カードが一枚しかないからです。

(事務局：大西係長) カード発行は、一団体につき一枚です。

(浅見 会長) カード現物の貸し借りをしているということですか？

(宮平 委員) そうです。

(高橋 委員) コピーはだめ？

(事務局：大西係長) コピーは不可です。現物確認をお願いしています。

(高橋委員) そうか、免許証みたいなものですね。

(事務局：大西係長) おっしゃるとおりです。関係者以外に流用されると困るため、そのような取り扱いにしています。

(浅見会長) 社会福祉協議会傘下の各グループに現物交付できればスムーズだし、技術的にも可能。ただし、集会所としては、登録許可カードを不正利用して、減免制度目的以外のことをする人が現れると困る。これでは減免制度が成り立たない。集会所指定管理者側も利用料金を収入としている。もちろん、制度に基づく減免は問題ないけど、不正につながることは望ましくない。このあたりは悩ましいですね。

(事務局：柏原部長) 現物提示の意味は、社会福祉協議会のお墨付きがある団体という確認です。集会所の受付で現物提示をすることによって、スムーズに減免の判断ができる。利便性という点ではご負担をおかけします。しかし、集会所受付側は減免判断の担保にしています。ご理解いただき、上手く活用いただければと思います。

(宮平委員) わかりました。

(出口委員) リードあしやでも似たようなカードを発行しています。登録許可カードを登録団体へ渡していて、登録番号も交付しています。利用申請時に「カードを忘れた。登録番号も分からない。」と言われた場合はもちろん貸しません。

(浅見会長) 他、特になければ次の話題に移ります。
お気づきの点やもう少し詳細を知りたいなど、自由にご発言ください。

(井関副会長) 課題2の「市民参画の方法や手法」について。これは、まったく別の二つの考え方があると思います。一つ目は、特定の分野の政策や計画を策定するプロセスで市民意見を取り入れる手法。二つ目は、どのような分野の問題に対しても何でも言える窓口のような手法。「市長との対話集会」は二つ目の「何でも言える窓口」に近いかもしれない。

問題は一つ目の、政策や計画を策定するプロセスでの市民参加ですね。パブリックコメントでの市民参加は、計画内容がほぼ固まった最終段階からの参加になってしまう。だから、パブリックコメントを提出したい市民側も、どうしても不満を言うだけになってしまう。そして行政側も「そうはいつでも…」という回答になってしまう。難しい問題とは思いますが、

計画案が固まっていない、より早い段階で意見を聞く場を設けることが必要です。広く市民意見を提出できる場合もあれば、地域代表や専門家で構成された委員会形式の場合もある。市民参画協働推進会議は後者に近いですね。いろいろな参加のチャンネルを作ることが大事だと思います。

政策や計画を策定時、早い段階での参加の場はできていますか？

(事務局：大西係長) 計画策定時に市民意見を聞くプロセスはありますが、計画によっては聞くことが難しい場合があります。今後は、意識的に早い段階で市民意見を聞くプロセスを取り入れていく必要があると思います。

(井関副会長) 担当課の立場では、計画の早い段階で情報公開して、意見をもらうことは、勇気が必要だと思います。

市民参画・協働推進課が、担当課の背中を押す立場になることが必要。それが、「第5次総合計画（後期）」での市民参画分野が横断的なポジションに立つ理由ではないでしょうか。市民参画・協働推進課が他の部局に働きかけていくことができればいいですね。

(事務局：柏原部長) 市長公室長が「第5次総合計画（後期）」の担当です。広く声を聞くようにしているようです。

(事務局：伊藤公室長) できるだけ若者の意見を聞くようにもしたいと思い、大学へ実際に足を運んだりしています。

(高橋委員) 具体的にどのようなテーマで聞いていますか？「第5次総合計画（後期）」の中身ですか？

(事務局：伊藤公室長) 具体的には「第5次総合計画（後期）」の中身についてアンケートをしたいと考えています。対象は芦屋市在住、在学の学生です。「芦屋市にどのようなイメージを持っているか？」「もしも自分が市長だったら、芦屋市には何が必要だと思うか？」という項目を取り入れたいと考えています。もちろん学生だけでいいとは思っていません。学生以外の市民への聞き方についても悩んでいます。

(井関副会長) 私は、沼津市で環境基本計画を策定時、市民委員会のようなものを立ち上げて意見を取り入れました。議論の中で、「その計画を具体的に実現するのは誰？」となり「行政もちろんだけど、自分たちも何かやるべきなのでは？」となった。このように「意見の場」や「市民参加の場」を設けると、担い手ができていきます。「自分たちも何かできることをやっとうこう！」となる。これは担い手不足の話とも連動します。

アンケートをとるだけだと、そういう展開になりにくいです。実際に議論をする場へ参加すると刺激を受け、そして「議論の場に参加したからには、自分も何かやろうかな。」という気持ちになって、集まったメンバーでグループを作って活動していく。行政職員と顔見知りになって「みんなも頑張っているから、自分も何かやってみようかな。」という気持ちになってくる。「市民参加の場」とは、そのような効果があると思います。

パブリックコメントのような紙ベースだけではなく、「場」を作って顔を合わせて議論する時間はとても大事です。面倒くさいことだけど、そういうことを充実させてほしい。

(事務局：柏原部長) 市長は「第5次総合計画（後期）」について、市民の意見を対話集会で聴きたいようです。今回の「第5次総合計画（後期）」から「教育」「文化」「市民参画」が統合されます。10月と1月に開催予定の対話集会では、統合された4つの計画をテーマに、直接市民の声を聞く予定です。

対話集会は市長が市民と対話するだけの場ではないと思っています。

「市長との対話集会」をきっかけに、市民同士の対話も生まれはじめています。対話集会終了後、参加者同士連絡を取り合って話をしたりするような、市民のつながりの場にもなっています。井関副会長がおっしゃるとおり「市民参加の場」は大事だと実感しています。

「私は何かに興味があるけど、どうしていいか分からなかった。」「一人だったらできないけど、こうしたらいいんだ。」「そういうヒントがあったのか。」「私が困っていたことは、社会福祉協議会に聞いたらわかるんだ。」「そもそも社会福祉協議会ってあるんだ。」「市民活動センターで自分の活動を相談したらいいんだ。」などのお声がありました。市長からの発信だけではなく、逆に市民から「自分たちはこうだったよ。」「こういうことをしたよ。」というような発言も聞けました。市長自身も市民の声が高まっていると感じているようです。

このような「市民参加の場」は行政としても、とても貴重だと思っています。来年1月に予定の「市長との対話集会」では「市民参画」がテーマなので、市民の声を拾う手法も入れたいと思います。併せて、市長公室長が申し上げた「若者の声」の参画も進めていきたい。

(浅見会長) 仕組みやチャンネルをたくさん増やして、結果的に市民力を高めることは、行政的にもいい話です。まずはチャンネルに市民が食いついてくれるのか？どのようにしたら、このチャンネルに入ってくれるのか？ベースになる市民の意識をどのように湧き立たせていくべきか？

市の施策としてチャンネル準備も大事だけど、市民がもう少しざわついている状態が必要ですね。その意味では、リードあしやで月に1回実施している「つどい場」も気になっています。

(事務局：柏原部長) 市からの情報発信も問題があると思っています。

「広報紙は見る」という意見と同時に「広報掲示板から情報を得る」という市民の意見割合も高いです。広報掲示板は市が設置している掲示板。他にも、自治会などの地域団体が設置している掲示板もあります。

広報紙や掲示板は、情報が自然と目に入ってくる。自然と目に留まることによって情報が得られる媒体です。

ホームページは逆です。情報が自然と目に入っていない。自分から情報を取りに行く。困った時に調べる媒体。

広報紙は全戸配布しています。また、広報掲示板についても、芦屋市は地域が比較的狭いので、市内を移動する時に目に留まりやすい環境です。広報紙や掲示板で情報を手に入れることは、どの市民もできるはずですが、DXであったりとか、電子で情報を手に入れる時代ですが、実は紙媒体は情報取得率が高いです。しかし、市民からは「そんな情報は知らない」と言われてしまい、難しさを感じています。「第5次総合計画（後期）」では「情報発信」をキーポイントにし、行政の大きな課題と考えており、市民参画だけにとどまらず、市全体の問題としてとらえています。忌憚ない意見やお考えをお願いします。

(高橋委員) ホームページが約3パーセントと聞いてゾゾツとしたけど、そういう意味なんですね。

(事務局：柏原部長) 調べ物をするとき、ホームページのトップページからたどっていくのではなく、「芦屋市 大型ごみ」で検索をする市民が多い可能性があります。実際はホームページから知りたい情報を入手しているのかもしれないけど、なぜか、ホームページが情報取得媒体という回答は低い。

(井関副会長) ホームページのトップページの話ですか？

(事務局：柏原部長) 私たちもアンケートにあえて「トップページ」とは書いていないですが、「情報を何から入手しますか？」という質問に対して、ホームページという回答の比率は低いです。

(井関副会長) 気になる文言で検索すると、ホームページ内の直接の該当ページが閲覧できるので、トップページ自体はあまり見てもらえていないのではないのでしょうか。

(事務局：柏原部長) おっしゃるとおりです。トップページって、あまり見てもらえない。「注目」や「新着」も掲載していますが、そもそもトップページが無視されている状況です。

(高 橋 委 員) トップページを見たら、たくさん情報があるのにね。市議会のことも掲載されているし。ただ、根本的にトップページから入らない。実は「芦屋市自治会連合会」もホームページがあるけど、なかなか使ってもらえない。難しいですよ。

(事務局：大西係長) 「ホームページから情報取得している」という回答が2.7パーセントとお伝えしました。ただ、さらに調べていくと面白いことが分かりました。地域で活動している人は、確かに広報紙からの情報取得が多い。ただ、地域で活動している人の中でも、さらに地域外でも活動する人たちはホームページからの情報取得が7.1パーセントでした。約3倍。そこも何か違いがあるのかもしれない。

(井 関 副 会 長) 民間の広告では、ホームページは「受けのメディア」です。興味を持った人が見に来る。逆に、「攻めのメディア」はCMや、新聞広告、SNSなどです。

ただ、「受けのメディア」だから必要ないということではない。「攻めのメディア」から「詳しくはホームページで」と「受けのメディア」に流すこともできる。トップページはスルーされる可能性があるけど、アクセス率とかは重視しなくてもいいと思う。

情報発信は「ターゲット設定」が重要です。「市役所のターゲットは誰ですか？」という問いに、行政は「全市民です」と言いたくなると思う。「道路」なら「道路に関係する人たちは誰か？」を考える。「福祉」なら「福祉に関係する人はどこの人で、その人たちがどこにいるのか?」「その人たちは、どのようなメディアと接点を持っているのか?」を考え、ターゲットへ情報を届ける必要があります。

ターゲット以外は扱わなくていいわけではなく、ターゲットをしっかりとイメージすることが大切。ターゲットはどのようなメディアがいいのか。広報紙や掲示板、SNS、その人たちが触れているメディアを想定して情報を投げていく必要があります。担当課はその点について常に意識的であってほしい。

(浅 見 会 長) 必要な人に、必要な情報が届いているかという話ですね。

(井 関 副 会 長) 「本当に困難を抱えている人ほど表に出てこないから、いくら待っても来ない。」とよく言われます。ターゲットがいる場所へ行くこともいいと思う。例えば、子ども食堂とかね。そういうことが大事です。

(眞 伏 委 員) 必要な人に伝えることは絶対に最低限必要です。ただ、例えば、子どもがいない市民は、教育情報を自分から取りに行かない。恐らくターゲット設定したときにも入ってこないでしょう。市は教育に力を入れていくと言

っているけど、子どもがいない市民は、市の教育の現状が分からない。知る方法もない。考えることも、意見を言うこともできないと感じました。もっと情報が欲しい。ターゲットへ届けると同時に、幅広い市民への情報発信も必要ではないでしょうか。何かしら、情報を知る方法があるといいと思います。

(浅見会長) 井関副会長から「プッシュ型(届ける)情報発信」と「プル型(取りに行く)情報発信」のご発言がありました。紙媒体は究極の「プッシュ型の情報発信」。全戸配布の広報紙がいい例だと思う。広報紙って情報量にボリュームがありますよね。広報紙を月1回しっかりと読めば、芦屋市の方向性や現状など、大概のことはわかる仕組みです。広報紙がメディアとして力強いのは当然です。

広報紙は究極の「プッシュ型の情報発信」だけど、同じ情報量をメールで見ると、全部読む人は少なくなると思う。LINE登録をして、紙媒体の情報がLINEで届いても、自分にとって重要な情報と重要でない情報が混在して送られてくるから、だんだん見なくなったりする。難しい思いながら話を聞いていました。ちなみに、眞伏委員は、市民委員募集の情報をどこから入手しましたか？

(眞伏委員) 広報紙です。

(浅見会長) やっぱ、広報紙はメディアとして強いですよ。

(眞伏委員) 強いですね。応募したときは、少し余裕がある時期だったので読んでいて募集に気づきました。ただ、最近は忙しいのでほぼ読んでいない。出勤中に読めるような、デジタル版の広報紙があればいいと思います。

(浅見会長) タブレットでめくれるような？

(眞伏委員) そうです。電車の中でもスマホで読めるような。

(浅見会長) 確かに、それはありがたいですね。

(事務局：柏原部長) 実はホームページから見るとも可能です。

(眞伏委員) 知らなかった。

(事務局：柏原部長) 結局そういうことですよ。そもそも見つけてもらえない。実は過去の広報紙もずっとPDFで掲載しています。

(眞 伏 委 員) PDF は閉じて開いてが面倒くさいから、アプリのようにめくれるスタイルだといいですね。アンケートも指でめくりながら答える形式になれば、かなり簡単になると思います。

(高 橋 委 員) PDF って見にくいですね。

(事務局：柏原部長) PDF はデータが大きいので1枚ずつの掲載になってしまいます。よくあるアプリで、本のようにペラペラとめくると、とても便利ということですよ。

(井 関 副 会 長) ウェブサイト業界の話ですね。芦屋市の情報が欲しいとなったときに、どれだけ簡単に情報にたどり着けるか。サイトの仕組みの話です。あとは、PDF は広げた紙で見るように設計されている。スマートフォンでは小さくて見えづらい。スマートフォン用へ最適化されるような表示を考えていくことが今後大事だと思います。

(事務局：柏原部長) 「ホームページめっちゃ調べにくい！」と、市民の方によく言われます。

(出 口 委 員) リードあしやでも、市民の方からよく聞きます。

(浅 見 会 長) 最近気になる記事があったので、普段買わない週刊誌をダウンロードして読んでみました。週刊誌と同じレイアウトでめくれるから読みやすい。広報あしやもダウンロードしたら無料配布されて、めくりながら読めるようなことはできないですかね。そんな手法もあると思う。

(事務局：柏原部長) 認識不足でしたが「カタログポケット」や「ひょうごイーブックス」からですと、芦屋市の広報紙もデジタルブック形式でめくれるようです。デジタルブック形式で読めること自体をきちんと発信すべきですね。

(浅 見 会 長) 「電車でも読めるようにしてほしい」という意見は、需要があると思う。しっかりと読む人は大勢いると思います。なぜなら広報紙は嘘がないし、噂話は掲載しないから。

(事務局：柏原部長) おっしゃるとおりです。広報紙は市の概要版のようなものです。眞伏委員のように、広報紙から市民委員募集や教育のことを知っていただき、興味関心を持っていただけることもある。やはり入り口としては重要な部分と感じています。

芦屋市は SNS や LINE もありますが、これもまったく広がっていない。そういう、間口の部分をもっと広げたい。例えば SNS や LINE、はじめか

ら入ってもらえるようにすればいいのか。災害時は情報がとても必要で、SNS ならすぐに情報が入るけど、そもそも SNS が広がっていないため、情報が入手されず不安にかられてしまう。

市民との情報共有、委員がおっしゃった「知らない」という声は、まさしく芦屋市の大きな課題です。市民参画の手法などを取り入れながら、実施していくべきと思いました。

(浅見 会長) 「ホームページのパーセンテージ少ない」ではなく「広報あしやのパーセンテージを上げる」発想に変えてみてはどうでしょうか。ホームページはあればいい、情報の宝庫です。「芦屋市は広報あしやを第一メディアとして、とことん追及します！」と言い切っちゃうこともありではないでしょうか。

(事務局：柏原部長) 電車のつり革広告のように宣伝してもいいかもしれないですね。「ホームページ見てみようかな」と興味関心を寄せてもらえるような、身近な媒体という捉え方になればいいと思います。

(井関 副会長) 芦屋市は、LINE はしていますか？

(事務局：柏原部長) はい、LINE 通報などをしています。

(井関 副会長) 兵庫県宍粟市に関わった経験から、宍粟市の LINE を登録していて、情報もよく届きます。LINE から広報紙もアクセスできるようになっている。これは「プッシュ型の媒体」です。登録すれば情報がくる。

(高橋 委員) 芦屋市の LINE もレベルアップしてもいいかもしれませんね。

(事務局：柏原部長) 私も芦屋市の LINE を登録していますが、確かに静かな LINE です。発信というよりも、LINE の中から選択ができるようにしていきたい。

(井関 副会長) LINE は目次ですよ。

(事務局：柏原部長) 目次ですね。普段は目次、何かがあった時は発信。LINE ならその仕組みができると思っています。

(眞伏 委員) 芦屋市の公式メディアを、いろいろな組合せで使えばいいと思う。
通勤途中で芦屋市の情報が一番入ってくるのは高島市長の X (エックス) です。先日の地震に関する発信も良かった。今やるべきことを、番号付きの段落ごとに書いてあって、とても分かりやすかったです。

(事務局：柏原部長) 市長も意識して、自身が媒体の一つであると認識しているようです。その時々情報、対話集会や教育もそう。市長の SNS を見て知る市民も多いようです。市として市長頼りでいいのかということはありません。ただ、そこから情報を得ていただき、市長を身近に感じていただくことは、今の芦屋市の特徴的な強みと思っています。見ていただいてありがとうございます。

(眞伏委員) 市長の X が印象に残ったのは、通勤途中にデジタルで見られた点が大きかったです。

(事務局：柏原部長) 隙間時間で得られる情報ということでしょうか？

(眞伏委員) そうなるとありがたいと思っています。

(浅見会長) X は究極の個人メディアです。市長アカウントは、他市でも有名だったりします。自治体アカウントって、徹底的に無害化された凸凹のない市の情報が発信されている。それも大事だと思います。

(眞伏委員) 無味無臭のような情報ということですね。

(事務局：柏原部長) 読みたいと思ってもらえないのかもしれない。

(浅見会長) 市長アカウントは市長の責任でやっていると思う。自治体のアカウントは、係長と課長と部長が決裁して公開になるからスピード的にも難しいところがあります。広報あしやが第一メディアで便利になればいいですね。

(眞伏委員) とても助かります。第一メディアから興味を持って、自分から情報を取りに行けばいい。まずは第一メディアとなる入り口が便利になればありがたい。

(浅見会長) あんな大量のテキストがある媒体、普通はなかなか読まないですよ。芦屋市発行だから読む。では、情報発信の話はこの辺りで終わらしましょう。

(松井委員) 「市民活動者のなり手不足の問題」と「資料3」全体について話をしてもよろしいでしょうか？

「No.23 公園概要の公表」について。公園利用者の増加はどのような仕組みなのかもう少し詳細を教えてください。

「No.44 地域防犯推進」について。防犯の話をプラスアルファですると、もっと面白いと思います。

「No.47 公共空間を活用した賑わい創出事業」（13 ページ）について。具体的にどのようにブランディングエリアをつくっているのか。アイデアなどを聞きたい。

「No.58 図書館敷地内美化活動」について。ガーデニングは公園にもつながりますね。

市民がガーデニングで成功した例は新潟県見附市です。イングリッシュガーデンを作って「そこを歩きましょう」と街並みを整えた。歩きやすい街を考えたときに、見附市は「市民がみんなで行きたくなるような場所を作ろう」と考えた。そして公園企画を市民に任せてみた。すると、市民がみんなで声を掛け合って、公園に行くようになって。結果、公園はイングリッシュガーデンにまで発展しています。街並がきれいになると防犯対策にもなるし、運動に参加する人も増えた。運動増加後と増加前を経年的にチェックすると、増加後の方が医療費は下がっている調査結果もあります。

芦屋市にも園芸ボランティアがあるから、見附市のように発展できればいいなと思う。園芸ボランティアに関して、担当課関係なくリンクさせると、さらに大きな活動に発展していくのではないのでしょうか。つなぐ仕組みを、市や社会福祉協議会も巻き込んで発展的に何かできないかと思いました。

私は「まちづくり・健康づくり・友の会」としての活動もしていて、過去に芦屋市市民提案型事業補助金にエントリーして採択された実績もあります。その活動から「街づくり」と「健康づくり」は必ずリンクしていると思う。健康の3原則は「栄養」「運動」「休息」です。「休息」の中に「社会参加」も入ると思う。「まちづくり・健康づくり・友の会」では、毎回テーマを変えた活動を実施しています。体操や暑気払いのための食の会など。活動を始めてようやく2年が過ぎました。

次は「市民の方に地域のことを考えてもらおう」と思い、グループワークを2回にわたって開催しました。会の冒頭で、市内で認知症カフェを立ち上げた方に、立ち上げ経緯などについて公演していただき、その後、参加者同士で地域課題についてグループワークをしてもらいました。話しが盛り上がったグループと盛り上がらなかったグループがあった。盛り上がらなかったグループの参加者は「私の住んでいる地域は困っていない。」と言う、そうすると他の地域の困りごとにまで話しが広がらない。70代後半から80代前半の方に地域社会のことをテーマにすると、考える方もいれば、考えない方もいた。それは当たり前のこと。でも、2回目は参加人数が減ってしまって残念でした。テーマ設定については反省です。

人数を戻すために、暑気払いのための食の会をもう一度して開催してみたりしました。「この会は一体何のための会なのか?」「健康だから健康のことばかりやると思ったけど、いろいろなことをするんですね。」という参加者の声もありましたが、このような声は私にとって最高の褒め言葉で

す。健康づくりは一つに留まらない。静岡県や山梨県、健康寿命優等生の地域でも明らかになっています。

私も団体運営については試行錯誤中です。次の担い手になってもらえそうな参加者を見つけても、役を振ってみたら次からは来なくなっちゃうとかね。次は、どんな手でスカウトしようか悩んでいます。

(松 井 委 員) 最近では、他団体の中核の人たちにも声をかけて、参加してもらっています。いろいろな会を巻き込んでつながりをつくろうと模索中です。

芦屋市民は市民意識も高いし、小さな取組はいろいろとやっているけど、つながることが何故か難しい。つながりがもっと広がれば、もっと大きな力になる。歯車はつながったときに大きな力になる。だから、他団体の代表を招待して巻き込む仕組みづくりにチャレンジ中です。

芦屋市も「防犯だけ」などではなく、いろいろな取組を広げることができないでしょうか。参加人数も増えると思う。市の力、社会福祉協議会の力、市民参画協働推進会議委員の方の力を借りて、他団体とつなぐ仕組みが何かできないでしょうか。それが担い手発掘の手法になると思う。提案です。なかなか成果が出にくい現状ですが、成果が出ればまたご報告します。

(高 橋 委 員) 公園を核とするAP（エリアプラットフォーム）という事業が、DX行革推進課主導で7月から始まって、僕も参加しています。六つの町と各商店のオーナーや社長級の人が集まって、公園でイベントを開催するという事業。毎月集まっていて、とても活発です。松井委員がおっしゃるとおり、公園はコミュニティの核だと思う。老若男女子ども問わず、みんなが集まる場所。良いモデルケースになると思っています。

(事務局：柏原部長) ありがとうございます。モデルケース、成功事例となり、芦屋市に広がっていけばいいと思い、取り組んでいます。事業者や地域の方、いろいろな方が活発に議論しています。

(高 橋 委 員) 自治会ももっと活性化したいけど、自治会長は70代80代の人が多い。若い世代へ、どのようにつないでいくべきか苦勞しています。高齢でも働いている人も多いから、バトンタッチが難しい。大きな課題です。そのためにも若い世代と自治会の交流の場が必要です。

教育もそう。子どもの場作りのような場はとても大事ですよ。先日、茶屋集会所で夏休みの子どもの面倒見ようという落語家の方がいました。宿題もやったりしながら、とても良い雰囲気でした。集会所はそういうためにある。どんどん開放すべきです。

(浅見 会長) 日本全国どこへ行っても、必ず担い手の話になる。若い人たちになかなか参画してもらえない。

Region Management Organization。国は自治会の上に「地域運営組織」のような団体を作ってはどうかとよく言っています。でも、「組織」ということが良くない気がする。

「O」 Organization 「組織」ではなく、「P」 Place 「場」をつくることが最も大事。場として運営ができればいい。

「組織」で「会長をやって」とか言われると逃げてしまう。「組織」というのがダメなのかも。「会場を借りる係」くらいならやってくれるかもしれないけど、「代表」だと断られてしまう。ただ、一番困るのは、実は市役所。市役所は「組織」へお金を出せるけど、「場」へお金出すことは難しい。「モヤモヤしたもの」に対してお金は出しにくい。

あと、私はリードあしやの「つどい場」という取組に、とても可能性を感じている。月一回、芦屋市内 20 箇所ぐらいで「つどい場」が同時に発生し、常に動いている状態ができれば、もうそれだけで大丈夫だと思います。

(浅見 会長) 「場」にお金はいらないと思う。「場」で「事業」をするならお金を出す。そういうことでもいいと思う。でも、なかなか難しいですね。私もモヤモヤしていることを言ってしまいました。

(井関 副会長) 人づくり、担い手づくりについて、市の戦略は考える余地があると思います。「資料3」のようなまとめ方もあると思うけど、もう少し市民活動の成り立ちやプロセスに沿って組み立てたほうがいい。「市民活動を立ち上げる」「今ある市民活動をより活発化させる」「今ある市民活動を終わらせない、継承する」という段階があると思う。松井委員がおっしゃった、違う分野の活動を連結させるチャレンジは「今ある市民活動をより活発化させる」ということで、とても大事だと思います。

(井関 副会長) いろいろな手法があると思います。ワールドカフェってありますよね。テーマは違うけど大きくは志が同じ人たちを集めて、シャッフルして話し合い、またシャッフルする。普段の悩みをシェアできるような場をつくる。市民活動者の多くは孤軍奮闘して悩んでいる。「地域のために本当にこのやり方でいいのか？」と不安に思いながら活動している人が多いと思います。

同じ志、同じ悩みを持った人たち同士、悩みを共有し、労い合い、褒め合うことは、とても大事。活動をより活発化させるための「出会いの場」をつくっていく。市民活動の担い手を増やすためには、体系的に、入り口から中間、そして出口があるような仕組みを組み立てるべきです。

その一環で、立ち上げることについてお話しします。政策計画の策定段階で、テーマに関心がある人たちが集まってきますよね。そこで、うまく組織化ができればいいと思うけど、行政はそれを育てるのが構造的に苦手のように思います。それは何故か。市民活動が小さな志からだんだん広がって組織化していくプロセスについて理解がないので、小さな動きを潰してしまうことがある。市民活動の立ち上げ段階にフォーカスして、どのように小さな頑張る思いをかたちにしていくべきか。もう少し行政内部でも研修してもらい、うまく焚き付けていくような働きを市の方でもしてくれるといいと思います。体系的にうまくやっていけるといいですね。

(松 井 委 員) 市民活動者同士が話し合う場ってありますか？

(出 口 委 員) リードあしやには、市民活動登録団体制度があり、毎年、登録団体同士の交流会を開催しています。年度によって交流方法は変えていますが、活動者をカテゴリー分けして、グループを組んでもらう。「困っていること」「自慢できること」「それは参考になる」「うちの団体はこうしているよ」など話し合いをしてもらいます。

今年度の実施は、市民活動登録団体の垣根を外そうかと考えています。市民活動登録団体も、登録をされていない一般の利用者もすべて集めて、活動内容を紹介、交流してもらう。コワーキング目的の利用者が市民活動に興味を持つきっかけになればいいし、個人でいろいろなことをしている人と団体のマッチングになればいいと思っています。お互いの情報発信の場を今年度は計画中です。

小規模な交流会も開催しています。リードあしやでは年4回、季刊紙を発行していて、発行の手伝いをしてくれる登録団体関係者を募集します。作業後、コーヒーを飲んで話をしていただき交流していただく。年4回開催しています。ここからコラボレーションが生まれることもあって、実は、ここでのコラボレーションが一番生まれているように感じています。大きい交流会でも、イベント終了後、個人的に話をして何か生まれることも増えていると実感しています。

(松 井 委 員) 担い手不足の課題に対して、芦屋市もいろいろと取り組んでいる。ただ、次の担い手になる世代は、現状ほとんど仕事をしていて、市民活動に意識が向かない。それが大きな担い手不足の原因と理解してよろしいでしょうか。

(出 口 委 員) 私もそのように思っています。担い手不足問題は交流会でも必ず中心になる話題です。この問題は本当に課題です。そして、結局モヤモヤで終わってしまう。

唯一こちらができることは、活動団体の横のつながりをサポートすること。ただ、活動人数増えているけど、担い手不足が解消されたわけではない。だから、皆さんモヤモヤで終わってしまう。

(浅見会長) 世代の壁問題を諦めてはいけないと思う。物理的に若い人はたくさんいる。動ける人もたくさんいるはず。声をかけた人が、たまたま忙しい人が多かっただけかもしれない。頑張りたい人が頑張れる仕組みになっていくといいけど、この話は答えがあるわけではない。これからも考え続けるべき課題だと思います。では次の議題に移りましょうか。

【議題2】芦屋市市民参画協働推進計画の芦屋市第5次総合計画（後期）統合に伴う市民意識調査（アンケート）項目について

(浅見会長) それでは、「議題2 芦屋市市民参画協働推進計画の芦屋市第5次総合計画（後期）統合に伴う市民意識調査（アンケート）項目について」事務局より説明をお願いします。

◆事務局より、「市民意識調査アンケート（資料4）」に基づき説明。

(浅見会長) 次期計画策定に向けた「市民意識調査アンケート」について、説明が事務局からありましたが、ご質問やご意見などはございますか。

(宮平委員) 問9の「地域」は、どこまでを指しているのかが分かりにくい。問9に「自治会やコミスクのようにお住まいの地域に根差した活動を指します」と記載がある。問10では「すでに参加している、また今後参加したい地域の活動はどのようなものですか」と記載があるけど、問10-8の「通訳」「国際交流」は地域ではないと思う。そうすると、問9と問10の質問と関連性がなくなってくる。

問13について。「まちづくり活動など、居住する地域にとらわれない趣味の活動」とあるが、「まちづくり」は「地域」です。質問の意味合いが違ってくるのではないか。質問の組立ては検討が必要だと思います。

問16について。一つだけ選んで回答することになっているが、近所の人によって選択する内容が変わってしまいます。その評価をどのように行うのか？

問17について。「考え」と「現在の状況」は意味が違う。「丸は三つまで」となると質問の意図と答えが違ってくると思う。

問51-6について。市長のInstagramも入れたらいいと思う。

問 52-6 について。自治会だけではなく、他団体も選択肢に入れてはどうでしょう？社会福祉協議会でも年 4 回発行していますので、入れていただけたらありがたいです。

(浅見 会長) ありがとうございます。事務局から説明をお願いします。

(事務局：大西係長) 地域の考え方については、事前に井関副会長からもご指摘をいただいていた。地域の考え方、自治会、コミスク、自治会や町内会よりももう少し大きい範囲の団体、その辺りは明記した方がいいとは思いますが。ただ、その課題や活動内容について、その辺りがどうしても書ききれないところがあります。そこで、今回書かせていただいたのが、自治会やコミスクのように、住んでいる町や地域で関係している問いは、前半部分で「お住まいの地域」とさせていただきました。後半部分は、地域とは関係ない、地域活動以外の趣味なども含めて、お住まいに関わらずということを書きたかったのですが、ここの表現が悩ましいです。なので、まずはお住まいのというところで行くと、自治会やコミスクという表現で、それではちょっと伝わりづらいですか。

(宮平 委員) 問 9 だけなら回答できるけど、問 10 に移ったときに「こういう活動しているけど地域には根差してない」という人は、ここは回答しないのか？国際交流の場合、地域限定ではない場合もある。そういう方は答えづらいのではないかと。

(井関 副会長) ここは難しいところです。「昔ながらの自治会的活動」と「自治会を飛び越えたテーマ型の活動」という区分は昔からあります。昔は実態が分かりやすく区別されていたからいいけど、今は「テーマ」と「活動メンバーの居住地の範囲」が混在してきている。いろいろな活動が生まれてきますから。そこで、昔からある区分をやめるというのはいかがでしょう。「テーマ」と「その活動メンバーの居住地の範囲」を取っ払って、「まちに関する活動をしていますか？」という大きな枠の中の選択肢の一つに「自治会活動」や「コミスク」という選択肢を入れてはいかがでしょうかと？

(宮平 委員) 「問 10」が地域というところに関連して答えが必要であれば、どうするか悩むところかもしれません。どのような活動をしているか知りたいだけであれば、例えば問 9 があって、問 13 があって、「こんな活動していますか？」という質問があれば答えやすいと思います。この質問の流れだと、どうしてもこれが「地域に根差した活動で何をしていますか？」ということなので。問 9 と問 13 が「活動していますか？」という質問があって、その後に「それはどんな活動していますか？」となれ

ば、問9だろうが問13だろうが、地域に根差していようが、根差してなからうが、「こんな活動をしています」という答え方なら特に文言をいじる必要はないと思います。

(井関副会長) 問10のいろいろな活動がある中に、もし聞きたければ「地域に根差した活動をしていますか？」という選択肢を入れてしまい、それに丸を付ければいいと思います。活動が地域に根差しているかの判断とテーマの話は混在してしまいますから。

(浅見会長) 問10に「自治会活動」という選択肢を入れてみては？

(井関副会長) 問9をなくして、問10の選択肢を増やす。

(浅見会長) 事務局的に、問9をなくすデメリットはありますか？

(事務局：柏原部長) 「第5次総合計画（後期）」に統合される「市民参画協働推進計画」の中の指標で、経年評価をしています。

(浅見会長) 定点観測しているということですね。

(事務局：柏原部長) そのとおりです。地域活動や行事に参加している人の割合なので「その活動を芦屋市以外のどこでやってもいい」というよりは「第5次総合計画（後期）」の中で「暮らしやすいまちづくり」や「市民参加」を経年評価しなくてははいけない。

自分の居住地域に限定した活動、例えば自治会やコミスクのような地域の活動から、わが町、芦屋市全体についての活動へと広がっていくということもあります。大阪市での活動だと芦屋市に還元されないので、評価が難しくはなりますが、その大阪市での活動が芦屋市のまちづくりに生かされるような、プラスの影響を及ぼす活動であればいいと思います。「取っ払って何をしている？」という聞き方は難しいと思っています。

(宮平委員) 「芦屋市」か「芦屋市以外」かは、大事ということですね。

(事務局：柏原部長) 大事です。経年評価して比較はしますが、やはり時代とともに地域のつながり方や地域という範囲は変化してくると思うので、それを意識した指標も必要かと思います。事務局として気にしているところはそこです。

(井関副会長) 私は、問13の「映画、アウトドア」が気になります。この「映画、アウトドア」は聞く必要ありますか？「ものづくり」もちょっと聞く意味が分からない。少なくとも映画やアウトドアは非常に趣味的でプライベート

な営みなので、これを聞く必要があるか疑問です。「よく映画を見ています」という場合も、丸つけることになる。

(浅見 会長) 問9と問13は選択肢が同じ。
問9と問13を比べる意図は何ですか？

(高橋 委員) 趣味みたいな話。そう考えると、地域にとらわれない活動として聞く必要はないのでは？

(事務局：柏原部長) 例示を広くした方が分かりやすいつもりが、広くしたために例示が飛びすぎて「結局何が聞きたいの？」という状態になっているような気がしています。事務局として作ったのに申し訳ありません。

前回の市民意識調査（アンケート）で「参加している活動はどのようなものですか？」の問いに「アウトドア」と回答した人が20人程いて意外と多かったので、例示を広げ、選択肢を広げたときに「アウトドア」を入れたようです。事務局としては「アウトドア」にこだわる必要はありません。

参加している活動や地域にこだわらずに、どういったことで地域に参加して、その方々とつながっていますかというところを質問したかった。

(事務局：大西係長) 「地域での活動」と「地域以外での活動」をそれぞれ聞こうとしました。今回は「地域以外での活動」はあまり細かく聞かずに「活動されていますか？」などでとどめようとした。細かく聞かないので、事例として挙げていました。ただ、この事例は、正直、趣味のようなものも入ってたりします。前回の上位からいくと「スポーツ」「子ども教育関係」「交流」「コミュニケーション」「まちづくり」というようなところが大半でした。

(事務局：柏原部長) 20人ほどが「アウトドア」と書かれていたので、事例として分かりやすいかと思いました。どのようなかたちで参加されているかまではきけていないですが。

(井関 副会長) その質問は、問16の質問に関係してくるのでは？

要するに、趣味や飲み友達でもいいから、地域で何かしらの交流をしている人と、地域との接点が少ない人を知るための質問。

「映画やアウトドアのような趣味でもいいから、地域の人たちと交流していますか？」ということ質問したいのであれば、「映画」や「アウトドア」が入ってきてもいいと思う。

「社会参加」「市民活動参加」「行政参加」があつて、地域と公共の関係よりも、一番ベースの地域の人たち同士つながりの方が重要で、それを把握することが必要です

そのことを把握するためであれば「アウトドア」「映画」「飲み友達」のような趣味のことが入ってもいいと思う。ただ、問13に入るのは少し違うように感じます。

(宮 平 委 員) 問13の「映画」とは、「映画を見ている」ではなく「自主映画を作っています」のようなことを聞きたいということですか？「アウトドア」とは「キャンプに行っています」ではなく「キャンプリーダーをやっています」のような？

(事務局：伊藤室長) ポイントは、孤立化ではない、地域につながるような他者との活動ということ。

(事務局：柏原部長) 相互扶助が弱くなってきているということで、要は、地域でのつながりが希薄化する中だけ「地域の人とつながっていますか？」「それが地域活動としてつながっていますか？」「趣味でもいいから地域の人とつながっていますか？」ということ、確認するために入れています。

(高 橋 委 員) 「コンサートへ行く」は入りますか？

(事務局：柏原部長) 「友達とコンサートと一緒に行く」も入っていいと思います。ただ、地域活動としてとらえたときに「コンサート」というより「音楽」「アート」という大きなくくりで答えてほしいです。

(高 橋 委 員) 社会生活をしていたら、どこかには活動が入ってくることが多いですね。

(事務局：柏原部長) そうだといいますが、「地域とつながっている」「地域の人とつながっている」「友達とつながっている」ことは、すべてイコールではないです。

(浅 見 会 長) なるほど、なかなか難しい。
井関副会長は、問9そのものがなくてもいいと話していましたよね？

(井 関 副 会 長) 問9と問10を統合してしまって、自治会やコミスクのような活動に参加している人は、問10の中で選択をすればいいと思う。

(宮 平 委 員) 問9-1か問9-2かの違いが重要かどうかですね。

問9-1の「年数回以上の参加／運営に関わっている」はだいぶ違うと思う。松井委員がおっしゃっていたように「参加」と「運営」はニュアンスが違います。今回の調査で、ここを分けるかはお任せしますが、今の段階でここまで分けて聞かなくてもいいと思います。

(井 関 副 会 長) 問10-8「国際協力に関する活動」も「運営レベルでの参加」と「手伝いレベルでの参加」があるはずだから、枠組みを変えた方がいいかもしれない。

(高 橋 委 員) 国際交流協会としても、問9については興味があります。要するに、地域活動や、どれほど興味持って参加しているのか。「運営」と「参加」で分けてもいいのかもしれない。

(浅 見 会 長) 少し整理をしましょう。「自治会や小学校区など、住んでいる地域に根差した活動を地域活動とする」か「住んでいる地域以外でも芦屋市内での活動なら地域活動とする」なのか、調整が必要だと思う。思いとしては整理しておきたいですね。第5次総合計画（後期）の中で混ざっているので難しいとは思いますが、地域活動を「住んでいる地域以外でも芦屋市内での活動」としてもう一度考え直すことで、「地域の中で」「地域の外で」「地域を越えて」という議論は必要なくなるのではないのでしょうか。整理はできそうですか？

(事務局：柏原部長) 全体との調整も図らせていただきたいです。分かりやすいようにしたいとは思いますが。前回もどこまでを「地域」とするのかは難しい問題だったので注釈を入れました。「地域」を市内か市外かくらい大まかに分ける方が、恐らく答えやすいと思います。結果をクロス分析したときに、どのように表現をするかは少しお時間をいただきたいと思います。
意見調整については、代表である会長へ一任させていただき進めさせていただきます。

(浅 見 会 長) 整理すると、地域活動の「地域」とはどこまでか、今は分かりにくい時代になってきている。「住んでいる地域限定」ではなく「芦屋市内」くらいざっくりで、話が通じるならそれでいい。
それよりも「一市民が地域でつながりを持って暮せているか」について、別途確認できるような質問があった方がいいですね。

(事務局：柏原部長) おっしゃるとおりです。有事の時、日々の暮らしの中でもつながっている方がいい。行政としても把握しておきたい。

答える側が、答えやすくするという必要だとも思います。質問を簡単に修正できない現状もありますが、全体的に早急に精査をさせていただいて、浅見会長と調整を図りたいと思います。

(浅見会長) わかりました。

(井関副会長) 最後に、意見だけ申し上げます。

問 11 の「参加している理由は何ですか」について。この中には、次元が二つ混ざっているように思う。一つ目は「何かをしたいから」「付き合いがあるから」というような非常に積極的な理由。二つ目は「負担が少なかった」という、理由というよりも「障害が少なかった」というようなものが混ざっていると思う。時間をかけてまで頑張って参加する理由だけで十分ではないでしょうか。「時間的負担が少なかった」「金銭的負担が少なかった」という回答は次元が違うような気がするのですがなくてもいいと思う。

問 17 について。宮平委員と同意見です。実態と考えが混在している点が気になります。

問 49 について。「市民の声」という表現よりも、「自分の声」や「自分の意見」の方がいいと思う。そこが気になりました。

問 51 について。A～D の四つの選択肢にプラスして「よく見ている」という、五つ目の選択肢があってもいいと思った。「この項目はよく見られているな」と確認できる。

問 56 について。問題は、ホームページにアクセスして探して読んで理解して課題解決につながる流れの中に、いくつかの障害があるから問題解決しないということ。「なかなかアクセスできない」「知りたい情報が探せない」「読んでも中身が分かりにくい」とかもあると思う。回答部分を整理した方がいい。

(浅見会長) 皆さまから、一通り意見が出たようです。ありがとうございました。ご意見に対する対応は事務局と整理をします。

(事務局：大西係長) 市民意識調査(アンケート)につきまして、ご意見いただきありがとうございました。会長と調整させていただき、第5次総合計画(後期)全体の会議体へ提出させていただきます。秋から年末頃にかけてアンケートを実施し、年度末前後に調査の集計や分析などが行われる見込みです。令和6年度から7年度にかけて第5次総合計画(後期)の策定を進めていく予定ですので、進捗に合わせてご意見を伺うためご参集をお願いすることになると思います。日程につきましては、事前に調整しましてご連絡させていただきますので、どうぞ引き続きご協力をお願いいたします。事務局からは以上です。

(浅 見 会 長) 以上をもちまして、本日の会議を閉会いたします。
ありがとうございました。

以 上